

道 徳

I 研究主題と道徳

1. 研究主題のとらえ方—道徳の「目指す生徒像」

道徳では、研究主題を踏まえ、目指す生徒像を次のように考え、2年次の実践に取り組んできた。

【道徳の目指す生徒像】

道徳的価値について誠実に向き合い、物事を多面的・多角的に考えながら、人間としてのよりよい生き方・考え方を追究し続ける生徒

中学校では教育活動全体を通して道徳性を養っていくが、その中核をなすのが、新たに位置付けられる「特別の教科 道徳」の時間である。激しい社会変化の中、誰も経験したことのない課題に直面した際に、道徳的に向き合い、考え、他者と協働しながら、よりよい方向を目指すという資質・能力を身に付けていくことが求められている。道徳的価値とは、社会とのかかわりの中で生きていくために必要なもので、人としてのよりよい在り方や生き方の礎となるものである。その「よりよい」を判断するためには、複数の道徳的価値がぶつかる状況下で、自分とは異なる考え方の理解を深めるべく、多面的・多角的な見方ができるようになる必要がある。特に、望ましい・すべきだと理解してはいるものの、なかなか実現や行動化できないという弱さに共感でき、さらに、それを克服するための方法や納得解などを考え出そうとしたときに、本音で議論するようになり、より深く自身の道徳的価値に迫っていけるものと考えている。

これまでの自分の経験や習慣や考え方などを基に、他者の捉えとの違いを知ったり、自身の理想と現実との差を受け入れたり、崇高なものに対する畏敬の念に気付いたりしていきながら、課題を解決していく。このような過程における心の揺れを自覚しながら、自らよりよい生き方・考え方を求め、見つめ直し続けていくような生徒を育てていきたい。

【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	<ul style="list-style-type: none"> その思考や行動が、自分や他者や社会へどのような影響を与えたり結果をもたらしたりするかを広く想像しながら、すすんでよりよい判断や解決の仕方を探っていく態度 	<ul style="list-style-type: none"> 価値理解、人間理解、他者理解を踏まえた、生徒が真剣に向かえる魅力的な教材開発と課題設定 生徒自身もつ潜在意識や本音などの可視化
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	<ul style="list-style-type: none"> 問題になっていることを的確にとらえ、考慮しなければならない立場や状況を把握したうえで、解決策を考えようとする力 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に考えさせたい価値を明確にした授業展開 問題に対する多様な感じ方や考え方を考慮しながら解決していく必要のある、場面および課題の設定
場に応じて判断基準をつくる力	<ul style="list-style-type: none"> 考えた解決策が、関係者や場面・状況を配慮したうえで最善のものであるかを検討し、納得解を求めていく力 	<ul style="list-style-type: none"> 建前や理想と、本音や現実的な問題との差に向き合えるような発問の設定
学びを評価し、課題を見付ける力	<ul style="list-style-type: none"> 授業を通じて触れた多様な見方や考え方を鑑みながら、自分の道徳的価値を見つめ直し、人としてよりよい在り方や生き方を考え続けていく力 	<ul style="list-style-type: none"> 授業を通じて得られた有益な見方や考え方にに基づき、方法知や実践知に踏み込んだり、教材から離れたりするなど、より一般化させながら学習を振り返る場の設定

2. 研究のあゆみ

前研究では、迫りたい内容項目に向けて生徒が自ずから考えを深化させていくような展開のさせ方と適切な評価の方法が、主な課題として残った。そこで本研究では、「考えた解決策が、関係者や場面・状況を配慮したうえで最善のものであるかを検討し、納得解を求めていくこと」を重視して取り組む。

1年次は、生徒が本気になって考え議論するような、問題解決型の教材・課題の開発に重点を置いた。その結果、思春期の真っ只中で揺れる気持ちとじっくり向き合える題材や、それまで常識として捉えてきたことを見直す契機となった題材、自分がとる行動の責任の重さを考える題材などを扱った際に、生徒は仲間との議論を自己内対話へ効果的につなげていることが分かった。それを踏まえて2年次は、議論することが自身の道徳的価値に深く迫るうえで有効な手立てとなるような内容項目の幅を広げることを目指して、授業を実践してきた。特に、複数の道徳的価値がぶつかり合う課題や、絶対の正解がなかったり折り合いをつけたりしなければならない課題にも取り組ませた。相手の立場を思いやったり、それぞれの言い分に同意しなくなったりするような状況を想定することで、広い視野から多面的・多角的に考えていく姿を目指した。

3. 道徳としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 誰もが多かれ少なかれ持っているであろう悩みを、自身に投影させながら考える教材が好評であった。人には、得意なこと、コンプレックスを抱えていること、自分の力ではどうにもならないことなどがあると認識することから、だからこそ多様な立場を受け容れたり他人に優しく接したりしようとする意識が強くなっていったものと思われる。
- どのような決断を下しても誰かが損をするような、いわばその状況に合った言動の正解がわからない状況に置かれたときにどうすればよいかを、それぞれの立場を踏まえて考えることが、大きな葛藤を生み、議論することが価値を深めるうえで効果的にはたらくことがわかった。例えば「思いやりがあればよい」「自分より他人を優先させたい」などと安易に答えを出すのではなく、その言動や思考や私情の先にはどのようなリスクや損失などがあるのか等、様々な観点を踏まえて総合的に判断しようとする姿勢を向上させることにつながった。
- 1年次に扱いが不十分だった「自然や美しいもののかかわり」について、深く考えることができた。古き良き文化や技術や美しさなど、一度消えたら元には戻らない、あるいは当たり前前に享受しているため有り難みを感じにくいといった、日常では目を向けないであろうことについて、道徳の時間に気付き、立ち止まって考えることの価値を見出していた。
- 生徒たちは、道徳の時間を模擬体験の場として捉えていることが窺えた。他人が題材となったもので考えたことを、自身や周りのことに置き換えてみることで、現在の自分に足りないことや今後の自分に必要であろうことを考えていた。また、それは学年や時期にも密接に関係があるようなので、扱う時期やタイミングを今まで以上に検討していく必要がある。
- ▲振り返りの内容とさせ方に改良の余地がある。結論そのもの以上に、なぜそこに至ったかを自覚することが重要である。議論することが効果的にはたらいていたかを生徒と授業者が自覚するためにも、誰のどのような意見に触れたことで自身の見方や考え方が揺さぶられたかなど、思考の過程に立ち返れるようにする必要性を感じる。また、毎時間の授業で考えたことつながりを、生徒が自覚できるようにしたい。さらに、現在の振り返りの仕方であると複数の価値に迫ることを良しとする風潮もあるので、それぞれの授業の中で特に深まりを感じたことへと向き合わせたい。